孔子を神として祭る
――曲阜孔子廟の歴史――

小　島　毅

1．はじめに

JR 御茶ノ水駅のホームから北東方向を眺めると、木々の間から瓦屋根を戴く建物を望むことができる。史跡湯島聖堂、かつて昌平坂学問所に付設されていた孔子廟である。孔子を祀る施設は江戸時代には日本各地に設けられていた。なかでも現存する著名な史跡として、遅くとも15世紀には存在した足利学校（栃木県足利市、伝承では平安時代創建）、1670年に創学された閑谷学校（岡山県備前市）、1708年建立の多久聖廟（佐賀県多久市）などがある。また、長崎には中国商人が設けた廟があるし、那覇には琉球国で活躍した久米の人々が守ってきた廟がある。もちろん、中国本土や台湾など華人系の居住地、ベトナム・韓国など儒教が伝播した国々にも多くの孔子廟が存在している。

孔子廟とは、簡潔に定義すれば、孔子を主神としてその弟子たちや歴代の儒学者たちを従属的に合わせて祀る施設である。釈奠（せきてん）ないしは釈菜（せきさい）と呼ばれる祭儀[1]が行われて彼らの栄誉を讃える。かつては地方官がみずからその司祭をつとめる決まりだった[2]。

それら各地の孔子廟のなかで総本山的な役割を果たしてきたのが山東省曲阜にある廟だった。本稿では曲阜が儒教の聖地とされる所以、そこの孔子廟が果たしてきた歴史的役割を概観する。そのほとんどが先行研究によってすでに紹介されている事柄であることをあらかじめお断りしておく。

2．孔子の生涯

孔子は BC552年または551年に生まれたとされる[3]。彼の生涯を記録したまとまった伝記で現存最古のものは司馬遷『史記』の「孔子世家」である。それでもその成書は BC 1 世紀初頭であり、孔子没後すでに400年近く後のことであった。したがって、この「孔子世家」の記述をそのまま史実として信用することはできない。しかし私たちに残された最古のまとまった記述が「孔子世家」である以上、孔子について語るに際してはこれに拠らざるをえない。また後世の儒教は「孔子世家」に基づいて孔子像を思い描いていた。それらのことを前提にしたうえで、これを見ていこう。

父は叔梁紇（しゅくりょうこつ）、母は顔氏の娘。小国魯の出身で、親が曲阜郊外の尼丘という場所で祈って生んだので、名を丘（きゅう）、字を仲尼（ちゅうじ）とした。早くに父と死別する。幼時には祭礼のまねごとをして遊ぶのを好み、長じて礼楽の研究と復興に志した。礼（儀礼）と楽（音楽）は周王朝創業の功労者周公旦が定めたものであり、周公は魯国の初代君主でもあったので、孔子はこの伝統を継

承しようとしたのである。そのため、周の都（現在の洛陽）に出向いて王室図書館長だった老子に師事した[4]。帰郷後、学生たちに礼楽や詩書を教える。魯国に出仕して下級官吏からしだいに昇進し、56歳で大司寇となり宰相職を摂行した。彼が主導する綱紀粛正政治は隣国斉を懼れさせ、その画策で魯侯や重臣たちは政務に熱意を無くしたため、これに失望した孔子は自主的に魯を去った。以後、弟子たちとともに国外で遊説の旅をすること14年に及ぶ。だがその意見を採用する君主はおらず、曲阜に戻って詩書礼楽の整理と易の探究にいそしんだ。そして、愛弟子顔淵の死と獲麟（後述）を機に魯国の年代記『春秋』を筆削する作業を開始し、「後世、自分はこの『春秋』によって知られるであろうし、また『春秋』によって非難されるであろう」と語った。古参の弟子子路が衛の内戦で非業の死を遂げると孔子の体調は急速に衰え、別の愛弟子の子貢が彼を見舞うと「泰山が崩れ、梁柱が折れ、哲人は萎える」と歌って死期が近いことを知らせた。その７日後に没した。BC479年に相当する年のことであった[5]。

３．曲阜に詣でる皇帝たち

孔子は生前報われなかったが、その教説は師承されて次第に広まり、秦の焚書坑儒を経て漢王朝のもとで国教としての扱いを受けるようになる[6]。以後、儒教は2000年に及び王朝体制を支えた。

孔子の生地であり晩年講学の地でもある曲阜は現在の山東省にあり、春秋時代の魯国の都城であった。司馬遷によれば、青年期の洛陽遊学と50代後半から60代の諸国遊説期間以外の、彼の生涯の大部分を過ごした町である。彼が著述と教育に従事した屋敷にはその子孫が代々住み続け、彼らは孔子の墓の周囲に葬られて集団墓地を形成した。また、孔子を祀る施設が王朝政府によって建設される。こうして「孔府」（邸宅）・「孔林」（墓域）・「孔廟」（みたまや）の３点が揃って聖なる空間を構成するに至る。

1994年、この３箇所が世界文化遺産に登録された。日本語名称で「曲阜の孔廟、孔林、孔府」という[7]。孔子ゆかりの施設であるからこそ世界遺産としての意義を具えることを明示する命名である。

孔廟とは、実は歴代王朝が命名した正式のものではない。そもそもの原初形態において何と呼ばれていたか、信頼できる史料の記録から実証することはできない。739年に唐の玄宗皇帝が孔子に文宣王という称号を贈ったことをもって、彼を祀る施設は（曲阜のものだけでなく）文宣王廟と呼ばれるようになった。日本でもすぐにこれを採用している[8]。

孔子の没後に始まる戦国時代を通じて曲阜を来訪した周王はいない。秦の始皇帝は皇帝に即位すると何度も領内の巡行をした。特に旧魯国・斉国の地（ほぼ山東省に相当）については東の海のなかに神仙の住まう蓬萊山があると信じ、山東半島突端にまで旅している。BC219年には泰山にみずから登って天の最高神と交感する儀式、封禅を行った[9]。泰山は聖なる山として信仰を集めていたからである。だが、近くの曲阜に立ち寄ることはなかった。彼とその政府が儒家思想を弾圧したことを思えば当然であろう。

漢王朝の開祖劉邦（高祖）は山東出身であり、天下平定後のBC196年に帰郷した際に曲阜に立ち寄った。そして孔子旧宅を訪問している（『漢書』高帝紀）。皇帝が曲阜に行幸した初例である。彼はこの５ヶ月後に崩御した。しかしその後200年以上にわたって行幸は無い。次に曲阜を訪れたのは後漢の章帝で、AD85年３月のことである。『後漢書』章帝紀は「祠孔子於闕里、及七十二弟子（孔子を闕里（けつり）に祠（まつ）り、七十二弟子に及ぶ）」と記述する[10]。

漢代に、孔子は将来の新しい王朝のために過去の経典を整理してその制度樹立に資することを図った人物とみなされるようになる。孔子は聖人であり、王位に即いて天下を治める資質を具えていた。ところが当時の政治的・社会的状況はその実現を阻んだ。孔子自身このことに気づき、そこで次の王朝のために活動していたというのだ。孔子は王位に即いていない王者の意味で「素王」と称される。「素王」という語は『荘子』天下篇に「以此処上、帝王天子之徳也。以此処下、玄聖素王之道也」として見える。「処」は「おる」で、前半は君主、後半は臣下のことを指している。ただし、ここの文脈は太古の聖王堯（ぎょう）・舜（しゅん）についての記述であって孔子のことではない。BC１世紀に劉向（りゅうきょう）が編集したとされる『説苑（ぜいえん）』貴徳篇は孔子について述べる文脈で「於是退作春秋、明素王之道、以示後人（是に於いて退いて春秋を作り、素王の道を明らかにし、以て後人に示す）」とある。後漢ではこの理論を王朝の正統化根拠の１つとして用いるようになった。章帝が曲阜に行幸して孔子とその弟子を祀ったのはそのためである。

孔子を祀る際にどう称したか、古い時代は史料の残存状況によりむらがあるが、唐の玄宗は739年に文宣王という王号を与えた[11]。1008年、宋の真宗はこれに２字を冠して玄聖文宣王とした。「玄聖」は上述の玄聖素王から採ったものである。ただし新たに考案された皇祖の名（玄朗）を避けて1012年には至聖文宣王と改めている[12]。1307年、元の成宗によってさらに２字が加えられ大成至聖文宣王となった。これと並行して孔子の子孫としてその祭祀を担う責任者（日本風にいえば本家の当主）にも爵位が授与され、世襲された。11世紀にその称号は衍聖公となり、以後清朝滅亡による王朝体制崩壊まで続く。中華民国ではこの爵位・称号を正式には廃止して奉祀官と改称したものの、俗には衍聖公と呼ばれつづけた。

明の世宗嘉靖帝は1530年に孔子の王号を除き去り、単に至聖先師と称する変更を行った。以後、清代にもこれが踏襲される。この改制の理由は私見によれば朱子学の教義に従ったためである[13]。1684年、清の聖祖康熙帝は曲阜孔子廟に「万世師表」の扁額を宸筆で与えた。孔子は素王（統治者）としてではなく、師（教育者）として崇敬されることになった。高宗乾隆帝にいたっては、在位60年間に計８回も曲阜を訪れて孔子廟に参拝している。孔子廟に現存する祭器は彼のときに作り直したものだし、正門に掲げられている「櫺星門（れいせいもん）」の字は彼の宸筆である。

1935年、中華民国政府は大成の２字を復して大成至聖先師とした。共和制下なので当然かもしれないが、王や公といった爵位ではない点で1530年の改制を継承している。

４．曲阜の聖性

曲阜の孔子旧宅すなわち孔府は、彼が弟子たちに授業を施した聖地とされた。しかも、ここでは奇蹟も生じた。古文（太古の字体）で書かれた経籍の発見である。

秦の始皇帝による焚書によって、儒教の典籍はほとんど亡失した[14]。漢代になって学者たちが経書をまとめ直して漢の字体（今文）で文献化したものの、復元できたのはごく一部だった。そうしたさなか、武帝の時にその弟である魯の共王が曲阜で宮殿として使用していた孔子旧宅の増築工事をしたところ、壁のなかから太古の字体で書かれた『尚書』『礼記』『論語』『孝経』が発見された（『漢書』藝文志）。これによって孔子が編纂した経典の復元作業がおおいに進んだのである。そのことを記念して今も発見現場は「魯壁」と呼ばれている。

こうした経緯によって孔子旧宅には彼を祀る廟が付設常置され、孔氏歴代の墓域を含めて儒教の聖地とみなされるに至った。それは上述したように世界遺産がこの３つ（孔府・孔廟・孔林）を名称とすることで今も継承されている。

1505年の序文を持つ『闕里志』は巻11「古蹟誌」で闕里の次に杏壇を挙げる。「杏壇」という名称は古い文献では『荘子』漁父篇に見える。ただしその文脈では孔子が弟子たちを引き連れた旅の途中で休憩した場所の名であり、曲阜にあるものではない。ところが11世紀に孔子廟を神聖化するための装置として、その正殿の正面に位置する場所を孔子が弟子たちを教えていた地点と称するようになったものである。この例のように、『闕里志』に列記される「古蹟」として新たな聖地が作られつづけ、今は観光スポットとして人々を集めている。杏壇は史実ではないのだが、すでに千年前に聖地として認定されていたというそのこと自体が、歴史的な文化遺産としての価値を帯びていると評することができよう。

孔子の生涯は事件ごとの画を描いて図示されるようになった。その総称を「聖蹟図」という。ここの「聖」は聖人の意だが、聖蹟は聖人ゆかりの場所すなわち聖地を示すことになる。諸事件の記載は『史記』孔子世家に依拠している。その１つで晩年の重要な事件が獲麟である。BC481年、魯の哀公が曲阜西郊で狩猟を催した。その時１頭の珍獣を捕獲する。孔子は実見して「麟」であると言上した。麒麟は聖人の統治下に天下泰平が実現した際にのみ現れるとされた瑞獣であり、当時のような乱世にはふさわしくない。すでに顔淵を失っていた孔子は麒麟を見て「わが道は窮まった」と嘆く。

『春秋』は孔子が魯国の年代記を添削して整理した典籍とされ、儒教で五経の１つとなった。その本文は「哀公十有四年春、西狩獲麟」で終わっている。魯の哀公14年（ここの「有」はand の意）はBC481年に相当する。文面通りには哀公が曲阜の西郊で狩猟を催した際に麒麟を捕らえたという意味であるが、その注釈書の１つで司馬遷の頃に最も有力だった『春秋公羊伝』では、実際には薪拾いが捕まえたのだけれども、麒麟は仁政を象徴する瑞獣であるから賤しい身分の者が捕らえたとするのを避けて、哀公みずからの狩猟で捕らえたかのように記録したのだという。孔子は自分の在世中に天下太平が実現しえないことを悟って後世に伝える勧戒の書として『春秋』を編纂した、それゆえ獲麟の記事で終わると解釈するのである。

この麒麟の死骸を葬ったとされる場所は麒麟冢と呼ばれ、麒麟台が造られた。現在も山東省巨野県には麒麟鎮という地名があり、そこの観光名所となっている[15]。孔子の聖蹟に価値があるとみなされるかぎり、これらの場所の記憶は生き続けるのであろう。

5．おわりに

後漢以降の歴代王朝は都に最高学府（一般的呼称は太学）を設け、そこに付設した廟で孔子を祀った。当時から全国各地の行政都市（郡・州・県などの政庁所在地）に学校を置き、そこで地方官が孔子を祀る行事が行われていた[16]。これが成文化・定例化するのは８世紀、唐の時である[17]。さらに宋になって11世紀には「学宮」という観念が成立する[18]。学すなわち学校と、宮すなわち孔子廟との複合体である。この複合施設は東アジア全域に広まった。東京の湯島聖堂も元来はそうであったし、足利学校や閑谷学校は今もその遺構を留めている。これらの廟には、孔子の郷里として曲阜が持つような聖性は無い。「万世師表」である孔子の教えを学ぶ教育施設の一部を構成しているだけだから、その場所特有の聖なる記憶は不要なのである。

あまつさえ、宋は1127年に起きた靖康の変以降、曲阜の地を治めなくなった。金の侵略を受けたからである。南宋は北宋からの連続性・同一性を存在根拠として中華王朝をもって自認した。しかし、中原を逐われ、儒教の聖地を失陥している状況は歴然としていた。そこで浙江省の衢州（くしゅう）に避難してきた孔子の子孫に衍聖公を継がせ、そこを孔氏所縁の新たな聖地とした。一方、曲阜に残った子孫は金から衍聖公に任じられ、南北２つの孔子嫡流が並立し、それぞれ南宗・北宗を世襲した。元・明・清では曲阜残留の北宗が本家扱いを受けている。

1949年４月、蒋介石が国共内戦に敗れて中華民国国民政府が台湾に遷る際、第32代衍聖公孔徳成はこれに随行して台北に移住した。彼自身古代文化の研究者で台湾大学教授をつとめている。曲阜はその後人民共和国の統治下に置かれ、封建反動思想の総本山として反面教師の役柄を与えられた。この間、蒋介石は伝統文化の庇護者として振る舞い、儒教への尊崇ぶりを演出している。中華民国は南宋と同じく、聖地曲阜を失陥しながらも移遷の地で儒教思想を保守する姿勢を示し、みずからの正統性を主張したのである。

ところが1990年代になると中国共産党による儒教批判は急速に影を潜め、それどころか儒教を自国文化の栄光を示す象徴として賛美しはじめる。1996年、曲阜の孔廟近傍に孔子研究院が創設され、江沢民宸筆の院名扁額を掲げた。孔子思想研究の世界的中心となるべく、広大な構内に壮麗な建物やオブジェを並べ、孔府・孔廟を凌ぐ勢いである。

儒教の聖地は今もなお王朝の文化的正統性を誇示する文化資源として利用されているのだ。

註

（１） 釈奠という語は『礼記』の「文王世子」に見える。その対象となるのは先師・先聖とされ、唐代には孔子は先師なのか先聖なのかが議論された。釈菜は供物として魚肉を避けた呼称。

（2） 特別な聖職者を持たず、俗人である君主や官僚たちが司祭をつとめるのは、孔子廟と限らず儒教の祭祀儀礼の特徴である。もっとも、日本は（律令時代を除いて）君主や官人ではなく僧侶や儒者がこれをつとめた。湯島聖堂は林大学頭が司祭をつとめていたが、これも世襲である以上、家職としての役割である。

（3） 生年に２説あるのは、前者（BC552 年説）が春秋学（儒教経学の一分野）で伝えられた説、後者（BC551 年説）は司馬遷『史記』の記述に根拠を持つ。もっとも、司馬遷も董仲舒のもとで春秋学を修めているので、彼がなぜ異説を記録したかは今となってはわからない。

（4） この記述に基づいて老子は孔子より年長であると長らく信じられていた。しかし現在では『老子』は紀元前５世紀の著作ではなく、また孔子と会見した老子の存在自体が虚構とみなされている。この伝承は司馬遷の時代に老子の思想が教学的に権威を持っていた事実を裏付けている。

（5） 小島毅『儒教の歴史』（山川出版社、2017 年）17~19 頁の記述を要約した。

（6） いわゆる儒教国教化をいつのこととするかには諸説ある。また、そもそも「国教」という用語に批判的な学説もある。卑見では後漢の章帝によって孔子廟参拝がなされる頃（後述）に国教化が完成したとすべきであろう（前掲『儒教の歴史』、76~77 頁）。

（7） 英語名称は Temple and Cemetery of Confucius and the Kong Family Mansion in Qufu である（https://whc.unesco.org/en/list/704/）。

（8） 『続日本紀』の神護景雲２年（768 年）７月辛丑条に「題曰文宣王」と見える。

（9） 『史記』の「秦始皇本紀」「封禅書」「淮南衡山列伝」など。徐福を派遣した話柄は「淮南衡山列伝」に見える。

（10） 『漢晋春秋』という史書（断片的に残存）には「闕里者、仲尼之故宅也、在魯城中」と記録する。72 人の弟子というのは『史記』孔子世家に「孔子以詩書礼楽教、弟子蓋三千焉、身通六藝者七十有二人」とあるのによる。ただし「仲尼弟子列伝」のほうでは「孔子曰、受業身通者七十有七人」とある。

（11） 『旧唐書』礼儀志四など。浅野裕一『孔子神話――宗教としての儒教の形成』（岩波書店、1997 年。2017 年に『儒教――怨念と復讐の宗教』と改題して講談社学術文庫に収められた）はこれをもって孔子が究極の地位を得たとするが、当時最も高い神号は帝であり、「文宣王」は諸侯王の地位にすぎない。これは後述する元代にいたるまで同じである。

（12） 『宋史』礼志八。祖先の名に使われた字を別の字に変更して用いない慣行を避諱という。清代には孔子の諱（丘）を避けて「邱」を用いた。

（13） 小島毅「嘉靖の礼制改革について」（『東洋文化研究所紀要』117 冊、1992 年）。従来はこの措置を王号剥奪と解釈する見解が強く、黄進興も専制的な君権による制限と捉える（『優入聖域――権力・信仰與正当性』、允晨文化実業、1994 年）。この黄論文は最初 1990 年に発表され、工藤卓司訳『孔子廟と帝国――国家権力と宗教』（東方書店、2020 年）に訳出されている。

（14） ただしこれは『史記』などの文献が記録する伝承にすぎず、秦の暴虐ぶりを強調して漢が周の文化を継承していると主張するための誇張である。

（15） https://baike.baidu.com/item/ 麒麟镇 /5921984?fromtitle= 巨野县麒麟镇 &fromid=8018401。

（16） 『続漢書』礼儀志上に AD59 年のこととして「郡県道行郷飲酒于学校、皆祀聖師周公孔子、牲以犬」とある。郷飲酒とは当該地域の官衙が高齢者を主賓として行う宴会。

（17） 732 年に完成した『大唐開元礼』に州県での釈奠の式次第が載る（巻 69 および巻 72）。

（18） 梅村尚樹『宋代の学校――祭祀空間の変容と地域意識』（山川出版社、2018 年）、54~57 頁。